
怪異犬 カイイヌ

一九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪異犬 カイイヌ

【Nコード】

N4084BA

【作者名】

一九

【あらすじ】

死んでしまった飼い犬のサヤに取り憑かれてしまった主人公は、正しくサヤを御払いをして、供養するべくオカルト研究会に属していた。しかし中々サヤは離れず、むしろ主人公は更に様々厄介事に巻き込まれていく。といった感じのお話です。学園物ですが高校ではなく大学が舞台で、オカルト要素やハーレム要素有り。少々世間離れた主人公たちの奇っ怪学園痛快ファンタジー！だと思えます。どうか気張らずに、暇なときに読んであげてください。

1（前書き）

僕、ハケ岳^{やつがたけ}一刀^{いっとう}は、今でこそ非生産的で自堕落な大学生活を送っているものの、高校時代は向かうところ敵なしの優秀な長距離ランナーだった。

どれだけ走っても疲れない。どれだけ速く走っても疲れを知らない。体力だけが自慢の、走るためだけに生まれてきた男であつた。

しかし、一年前。僕は突然疲れた

走っても走っても尽きることのなかったスタミナは、徐々に衰えを見せ始め、僕は完全に疲れてしまった。

走ることが出来なくなってしまう、体力だけが取り柄だった僕は恥じることが多くなった。

だから僕は、止まった。

走ることを辞めた。

だけどそれは仕方のないことだったのだ。

実家で飼っていた愛犬のサヤが死んだのは、丁度一年くらい前だった気がする。

気がする。と言うのは飼い主の一人として如何なものか。

愛犬の方が聞いたら「愛犬の亡命日くらい把握して当然だろう」と、怒られてしまうかもしれない。

しかしあのワン公は何故か、家族の中で唯一、僕にだけ懐かかった。よく家族の中で年齢が一番下の者を、犬は自分より下に見る。と聞くが、妹の一言にはよく懐いていた。

つまるところ僕はあまり犬が好きではなかった。

犬は他の動物よりも人間に従順とか聞く。

それはそうされた人達の意見であり、ステルス・マーケティングだろうと僕は信じている。

季節は寒い寒い冬だった。僕が初めて碓氷^{つづみ}メリアと出会ったのは寒空の下であった。

クリスマス色―とでも言おうか。街の街路樹に張り巡らされた煌びやかな光の装飾は、僕の弱小な瞳には少々眩しいくらいであった。師走も十七日目に突入していた。

大学での講義の受講を終え、凍てつく寒さの中、僕はアーミーコートの左右のポケットにそれぞれ両手をつっ込んで、薄れたカーキ色のブロックが所狭しと並べられた歩道を歩いていた。

まったく、夏の暑さというのは我慢さえすれば何とかやり過ごせるものだが、なかなかどうして。冬の寒気には耐えようにも、絶え

そうである。

最近は毎日のようにこうして厚手のコートを羽織る寒さであったが、今日の寒さは格別。

別格。

段違い。

お門違い。

お天道様が顔を覗かせていないのも理由の一つだが、前進を遮るように全身を包み込む寒風も乗じて、冬將軍は僕ら歩行者に、物理的な寒さを与えていた。

暫く下を向いて歩いていると、さんさと、深緑色のアーミーコートに白い結晶がふれた。

空を見上げる。

曇天だ。

さんさんと、降雪である。なるほど、これも僕がいつにも増して凍えている理由の一つか。

聞けば、来週はクリスマスとかなんとか。

神仏混合信仰宗教の日本人が、キリストの生誕に祝詞を挙げるなど、笑止千万である。

そんな事はいざ知らず、擦れ違うカップルは素敵なホワイトクリスマスを迎えるのであろう。

蜜月な関係の男女から見れば、この光景はロマンチックなんていう安い言葉で片付けられるのだろう。

だが冗談じゃない。

こんな光景はただただ僕の昂揚を冷ましていくだけ。

冷めるのは身体だけで充分だ。

震える唇を噛みしめ、僕は駅へと続く帰路を歩んでいた。

また暫く歩いていると、薄れたラーメン屋の前の赤信号につかまっってしまった。

僕は信号は嫌いだ。理由は今は述べないけど。

「あのう、すみません」

ポケットの中の手を吐息で暖めようと出したその時。

ミドルカットがよく似合う彼女は、まるで飢えた狼の檻の中の伺うように、弱々しく僕に話し掛けてきた。

恐らく、彼女は僕と同じ大学に通う生徒であろう。

この道は大学から駅に向かう最短ルートだ。こんな田舎道を若い人間が歩いているとしたら、それは九割方、僕と同じ大学に通う生徒なのである。

見ると僕を見上げている彼女の顔は、一七五センチある僕の胸辺りに位置していた。

小顔で童顔気味、透明な肌には薄く軽いメイクをしていた。

目は少々垂れ目だが、パツチリとしている。

首にはクリーム色のマフラーを巻いており、ヘッドフォンをほったにずらしていた。

評して中々可愛らしい女子おなごであつた。

こんなに可愛いらしい女の子がどうして、僕になんか話しかけてきたのだろう。

・・・ははん。分かつたぞ。

つまりあれだ。

聖夜を共にする筈だつた彼氏に聖夜直前に振られてしまい、もう誰でもいいからちゅっちゅしたい！と欲望剥き出しで迷走していた矢先に、独り寂しそうに歩く僕が居た。

というわけだな。

うんそうだ。そうに違いない。

僕の容姿を後ろ姿だけで判断してしまったのは判断ミスだったな。

まあ如何なる不純な理由があるにせよ、話しかけて来た女の子に素っ気のない態度をとるほど、僕だって野暮じゃないさ。

「なになな？」

「えっと、社会学部の一年生、八ヶ岳くん・・・だよな？」

・・・ほう。この女子。僕の事を知っていて話し掛けてきたのかと、するとどうだろう。

僕が先程考察した、この子が僕に話しかけてきた理由からすると、この子は僕に興味がある。付き合いたいとおもっているんじゃないだろうか。

そうだ。そうに違いない。

大学に入って八ヶ月。ようやく僕にも春が訪れたというわけか。しかしここは無難に、慎重に、女性慣れしていないことを悟られないように接さねば。

僕が所属しているオカ研にも一人、女の先輩が居るけど、あれは女性としてはノーカウント。ノーカンだ。

電話帳の中に入っている女性の数を友達と争うときに、自分のお母さんや妹を数えないカウントしないのと同じである。

・・・まあ最も、そんな機会は一九年間の人生で、ただの一度も無かったわけだが。

しかし、僕は僕の身体の中に微かに漂う春訪れを確実に感じていた。「そうだけど」

「ああ、やっぱり！良かった。生で見ると全然違う人みたいなんだもん」

そういつて彼女はなにやら学生証らしきものを差し出してきた。

・・・というか、僕の学生証だった。

勘違いもここまで行き過ぎると唯唯煌びやかである。

彼女はただ単に僕が落とした学生証を拾って、僕に届けに来てくれただけのことであつた。

なんとまあ、僕は素晴らしくポジティブな勘違いをしてしまつていたもんだ。

心の中の声とはいえ、数秒前の自分の心の口を針金で縫いつけた気分だ。

「ありがとう」

そういつて僕は彼女から学生証を受け取ろうと、学生証を掴んだ。が、彼女は学生証を握る手に力を入れ、学生証から手を離そうとしない。

顔を見るとにこやかな表情で首を傾げていた。

いや、いやいやいやいやいや。

えっ、なに？どうしたの？

なんなのこの子？僕はどうすればいいの？

困惑する僕の表情を閲覧して悦に浸るかのように彼女は満面の笑みで微笑んでいた。

とりあえず僕も笑顔を作りながら、力をいれて学生証を引っ張ってみた。

が、何故か彼女から学生証が奪い返せない。

いや、彼女はなにも僕の学生証を奪ったわけではないな。

だからこの場合は、取り返せないか。

いやそれも違うな。拾ってもらったんだから・・・貰い返せないか？

僕が悠長な事を考えていると彼女は唐突に指を離した。

「ハケ岳君。ありがとうなんて言いつつも、心の中では不純なことを考えていなかった？」

ギクツ

生まれて初めて僕は自分からギクツなんて擬音を耳にした。

良い体験をさせてもらった。

凶星である。

しかし何故、彼女は僕が不純なことを考えている（正確には不純なことを考えているかもということを考えていたわけだが）ことを見抜いてしまったのだろうか。

つといかんいかん、今は彼女からの僕への信頼を回復させることの方が先だ。

「や、やだなー。そんなこと全然思っ^てないよ！」
思っていた。

「ふーん。ま、いいけどさ」

彼女の顔からはいつしか微笑みが薄れ消えており、代わりに訝^{いぶか}しげな表情をしており、僕を睨^{にら}んでいた。

「うん。そんなこと、僕はこれっぽっちも考えていなかったよ。そ

れより拾ってくれた君に対する御礼の言葉で脳内が埋め尽くされていたよ。今、僕の名前で脳内メーカーで占えば、確実に『謝々』で埋め尽くされるよ」

そう言いながら僕は財布の中に学生証をしまった。

「なんで中国語・・・」

彼女は先程の怪訝けげんそうな顔から一転、今度は嘘みたいに明るい表情になった。

感情がルービックキューブみたいに激しく入れ替わる子だな。

「嫌だなあ。ハケ岳君。私が人の手の中で廻されるって言いたいのか？」

彼女は少し苦い顔をして笑っていた。

む。僕は知らないうちに脳内言葉を口に出してしまっていたのか。だとしたら失礼千万だな。

「いやいや、そういうことじゃなくてだな。っとそうだ、まだ名前聞いてなかったよな？」

「碓氷うすいだよ。碓氷メリア。石偏いふとじに舊鳥ふるとりが氷るって書いて碓氷うすい。メリアはカタカナね」

メリアか。

日本人としては変わった名前だ。ハーフだろうか。

そういえばどことなく欧風な雰囲気を感じさせている。

頭髮もアジア人特有の染めあげて黒みのかかった金髪とは違って、艶やかな金色は一本一本が輝いている。

・・・よく観てみると、彼女は身長は少々低いものの、コートの上からでも分かる程の蠱惑こわくてき的な体型をしていた。

胸部は大きく膨らんでおり、ウエストは引き締まっている。ヒップは程良い大きさをしている、太ももは寒空の下、曝け出されていた。カーキ色のコートとタッグを組んで、絶対領域を作り出している黒のロングブーツは、スラッとかモシカのようにのびていた。

ハーフだとしたら何処の国だろうか。

僕がそんなことを考えていると

「あ、お婆ちゃんがイタリアの人らしいの。だからクォーターかな？」

と彼女は恥ずかしそうに、曝け出された太ももを隠しながら口を走らせた。

さつきから僕が思っている事を読んでいるかの如く、悟っているかのように、彼女は自己紹介した。

会話は楽だが、なんというか

見透かされしまっているようで非常にやりづらい。

それに、らしい。とはどういうことだろう。

しかし、そこはオカ研の先輩の受け売り。人は触れられない部分を、グレーにするのだ。

曖昧に。微妙に。靄をかけて喋るのだ。

ならば僕も深くは追求しないのが。紳士というものだろう。

「あーイタリアの。どうりで、純粋な日本人にしては珍しく綺麗に髪が染まつてるなあと思ったんだ。それによく見てみれば碧眼なんだな。僕、生まれて初めて生のブルーアイを見たよ」

「私の瞳をそんな目に良さそうな健康食品名みたいなので例えないで！」

いいツツコミだ。鋭い目付きだ。

それにしても彼女は綺麗な瞳をしている。

クォーターと言っていたが、なるほど、純粋な碧眼ではなく、少々濃いブルー、深遠の海の色。

それはまるで、何もかもを引き込む海底の奥底の入り口のような色をしていた。

「あ、えっと」

彼女は恥ずかしそうに顔をクリーム色のマフラーに埋めた。

しまった。いくら瞳が綺麗だからといって、初対面の男性に、しかも僕みたいな無粋な男に見られてしまえば、誰だって嫌だろう。

自分の気の使えない性格に嫌気が差してしまう。

こんなことだから、十九年間も生きてきて彼女の一人も出来ないの

だろう。猛省しなくてはな。

「おっと、ごめん」

僕はそう言っていると彼女の瞳から目を背けた。

しかしどうだろう。

ビューティーフルなんていう英単語は、恐らく生きていても今後使うことがないであろうと思っていたが、彼女の瞳にその英単語は適材適所ではないだろうか。

見れば見るほど引き込まれそうな深淵の青。

日本の色表現では表現出来そうに無い、実に美しい色彩であった。いや、瞳だけではない。

本来、学生証なんてものを拾ってしまったら、学務課に届けてしまえばいいことだろう。

しかし彼女はそれをせずに僕に直接届けてくれた。

見ず知らずの僕に。

彼女の瞳が綺麗なのは、なるほど心の清らかさも反映しているのではないだろうか。

性格は顔に出る。と言うが、彼女はそれが瞳に映し出されている。

内面の美しさが滲み出ているのだ。

話しかけてきた彼女を一目見ただけで、男に餓える雌猿だとか、僕はそんな愚考に到ってしまった愚鈍な自分を殴り飛ばしたくなるな。感謝の意と罪悪感が混合する僕の脳内では、何かも解らぬ感情が沸点に達していた。

「えっと、じゃあ僕はこれで」

湧き上がる、いや、沸き上がる気持ちを冬の寒風で醒まし、その場を立ち去ろうとしたその時。

「まって、ハケ岳君。駅に向かっていているんでしょう？なら駅まで一緒に帰ろうよ」

お話していい？と彼女は続けた。

これは、大歓迎だ。

罪悪感に悩まされる僕の煩悩は一気に吹き飛んだ。

しかしどうだろう。

女性慣れをしていない僕がこのような状況になるのは、守備固めで一軍に呼ばれていたのに、突然ここ一番の場面で代打に抜擢された野球選手のような気分である。

だいたい、気兼ねなく話していたが、一体彼女は何年生なのだろうか。

もしかしたら就職を間近に控えている四年生なのかもしれない。だとしたら普通にタメ口を聞いちゃったよ。

「あ、えっと」

僕がどもっている、彼女は見かねたように口を開いた。

「あ、気とか使わなくて良いからさ！それと私もまだぴちぴちの一年生だよ。ハケ岳君とおんなじ」

そう言う彼女はにこにこ笑顔を見せてくれた。

既に入學して八ヶ月が経とうとしているのに、ぴちぴちといった表現は如何なものか。

でもまあぴちぴちなのであろう。

主に、肌とかが。

「そっか。じゃあ帰ろう。えっと、なんて呼んだらいいかな？」

「メリアでいいよ。私もハケ岳君のこと、なんて呼んだらいいかな？」

「ああ、僕も下の名前と呼んで欲しいな。だいたい僕、ハケ岳って名字、気に入ってないんだよな。カッコ悪くってさ」

「どうして？ハケ岳って確か地名性だね？確かに珍しい苗字だけど、そこまですごい悪いつてわけじゃないんじゃない？」

「いやさ、確かにそうなんだけど。イメージの問題かな。『ハ』は兎も角。『ケ岳』がどうもね。なんかこっ、岩肌を連想させるごっついイメージがあつて」

「うーん。わからないなあ。私としては三文字名字ってだけで随分と垢抜けているを思うけど・・・」

垢抜けている苗字。初耳である。

「わからないかな・・・まあ。この話で同意を得られたことは無いんだけどな」

「ないんかい」

吉本新喜劇顔負けの絶妙なツツコミが僕の胸を突いた。

「それを言うなら、碓氷だって中々垢抜けている苗字だと思うぜ」
氷とか入ってる時点で。

「碓氷・・・ね。かつこいいよね」

「？」

なぜか彼女は、あくまで他人事のように自分の苗字を賛美した。
なぜだろう。僕はこの時、踏んではいけない物を踏んでしまった気がした。

苗字。先祖代々受け継がれる、血縁の証。

一般庶民が武士と同じように苗字を持ち始めたのは、廃藩置県の後だとか。

大政奉還後。日本では自由に、好きな苗字を名乗る事が許され、それまで名だけであった一般庶民達はこぞって自分の苗字を考えたそう。

深い理由があるように見せて、存外、至極簡易的な理由の苗字も多々ある。

僕の場合は、八ヶ岳。

地名性である。

長野県の東部に位置する八ヶ岳連山が恐らく語源であろう。

富士山との背比べに僅差で勝ち、富士の山に鎮座する木花咲耶姫このはなさくやひめを憤慨させ、叩かれ、八つに砕け散った哀れで無様な連山である。

そんな理由もあって僕はあまり、この苗字が好きではないのだ。

苗字の話の後は暫く沈黙が続いてしまったが、少し経つとまた彼女は気さくに話題を振ってきた。

彼女は話し上手というか、聞き上手で、駅までの道程は話題に困ることは無かった。

いつもは長く感じるこの帰り道も、何故かこの日は、とても、とても短く感じた。

2（前書き）

憑依。

とはなにかご存知だろうか。

地域や時代によっては、憑霊、神留^{かんづま}、神宿り、神降ろし、神懸り、口寄せとも呼ぶらしい。

亡霊、

妖怪、

妖兽、

神様、

物怪^{もののけ}、人外、人ではない者達。

この人外共に共通することは全て、何かしら強い念を持っているということだ。

強い想い。

それは時として

愛であり、

憎悪であり、

思想であり、

夢であり、

妄想であり、

夢想なのだ。

回りくどい前置きはここまでにして、ここから腹をくくって、首も括りそうな本題を話そう。

世間は荒唐無稽だと笑うかも知れないが、昨年、奇しくも僕は憑依された。

美しくて、愛しくて、女々しくて、

壮麗で、綺麗で、端麗で、

煌びやかで、雅やかで、艶やかで、

魅力的で、幽玄的で、耽美的で、

儂^{けんらん}げで、優雅で、靈妙で、

絢^{けんらん}爛豪華な白い体毛をした犬に憑かれてしまった。

僕が持っている乏しい語彙をここまで並べてみても、その美しい毛並みを文字で伝えることはかなり難しい。

それ程まで、白なのだ。

憑依^{いただき}の頂^{つくもがみ}、九十九神の色、神の色。禁色。

そんな白い犬に僕は取り憑かれてしまったのだった。

「なにかにいます」

部屋に入るなり、そいつは僕の衣服に鼻を近づけて言った。

そいつは、見た目は僕と同じ年くらいの女の子で、冬だというのは真っ白で布地が薄いワンピースを着ている。

両手首には、もふもふとしているシュシュらしき物を付けていて、白い頭髮は、十回程度ストレートパーマを掛けたのではないかというくらい真っ直ぐで、肋骨の辺りまで伸びていた。

尾っぽこそ生えていないものの、頭部に生える二つの獣耳が、彼女の正体を物語っていた。

「なにがだよ。別に今日は変わったことは無かったぜ？」

「ご主人。においがします」

ジト目で、テンションの低い声のまま指摘される。

ああ、メリアと駄まで一緒に帰ったからか。女性の匂いがするのだろう。

まあ僕が誰と帰ろうが、何をしようが構わないで欲しいが、こいつにとってはそうもいかないのだろう。

寄生している樹木が倒れてしまえば、宿り木自体も死んでしまうように、僕に何かあった時に一番困るのは、こいつなのだから。

一年前。この世から旅立っていた我が家の番犬。愛犬。家族。サヤ。

サヤは死んでしまった。筈だった。

しかし、サヤは今こうして僕の眼前に半人の姿で、犬神・叉夜として、人語を喋り、二本の脚で立っている。

そう。僕は一年前に昇天した筈のこいつに憑かれた。

叉夜は、死んでから僕に懐憑いたのだ。

『憑依』と呼ぶのだと、オカルト研究サークルのあの胡散臭い女の先輩は教えてくれた。ただ何故僕に憑依したのかは先輩もわからない

いと言っていた。

まったく、一度死んだくせに、まだ長々と顕世^{けんせ}に居座っているこいつ。とつとと常世^{じょうよ}へと旅立ってほしいものである。

僕は犬と幽霊が嫌いなのだ。

幽霊ではなく、私のしゅぞくは神獣^{しんじゅう}です。犬神です。あんなやつらと一緒にしないでください。

と、毎度又夜に言われてしまいが、僕からしてみれば又夜は、十分に幽霊としての合格ラインは越えているように思えた。

いや、幽霊としての合格ラインなんてものが存在する前提で話すのも、なんだか可笑しなものだが。

要するにこいつは、いや彼女は一度死に、再び神獣として蘇り、僕に憑依したのだ。

「大学には女子も沢山いるからな。それで匂いがついてしまっても仕方のないことだろう。それともなにか？お前は僕が女の子と仲良くするのを許せないのか？まったく、嫉妬は簡便だぜ？焼くのは餅じゃなくて」

「いえ、ちがいます。ご主人」

僕の言葉を遮って、又夜は勉強椅子に座りながら喋り始めた。
畜生、オチくらい言わせてくれよ。

サヤは尖った耳をピクピクと動かし、伺うように僕を見た。

「ご主人。私がいつているにおいがするとは、そのままのいみではありません」

「あん？そのままの忌みて、どういう意味だよ？」

「ふざけないでください。ころしますよ」

又夜は表情一つ変えず、床に座っている僕の肩に、組んだ足を乗つけてきた。

僕は直ぐ様乗つけられた足を、肩から勢い良く振り落とした。

良い身分だ。このワン公。本当に僕の事をご主人だと思っているのだろうか。

「きやうん」

足を振り払われてバランスを崩したサヤは、そのまま椅子ごと床に倒れた。

ざまあみろ。

「うーいたたたた・・・なにをするんですっ!」

ふむ、興奮したからって語尾にワンが付いたりすることはないのか。

「お前こそ、ご主人様に向かって何しやがる」

僕は低いトーンで答えた。

はだけたワンピースから色の白い太ももが、顔を覗かせていた。

「むむむ・・・動物ぎゃくたいですっ!動物愛護団体のかたが今のこうけいをみたら、ご主人は死刑にしょされます!」

「そうか。僕は死刑になるのか。じゃあ心置きなく余生を堪能しなくっちゃな」

そう言っていると僕は転んでいた叉夜の両足をがっちりと掴み、勢い良く開脚させた。

「うぎゃー!!!!!!???」

「ほほう、今日は薄いピンクか。どうせこうしてご主人様にパンツを見られて興奮しているのだろう?まったくイヤラシイ雌犬め!」

僕が言い終わるとほぼ同時に、叉夜は上手く体を捻らせ、僕の右手首に咬み付いてきた。

「うぎゃー!!!!!!???」

今は人の姿をしていようと、元は犬である。咬みちぎる力は健在である。僕の右手首の痛覚は悲鳴を上げた。

「離せ・・・この!」

ガチン。

叉夜の上顎と下顎が勢い良く閉じる音が部屋に響いた。

憑依された人間には、人外並みのメリットと、人並み外れたデメリットが出来てしまうそうだ。

ただこの場合、人外並みのメリットというのは、あくまで人外であればメリットになるくらいの話であって、普通の人間を目指す僕にとっては、このメリットというのは只々デメリットでしかない。

憑依されて良いことなんて何一つ無いのだ。

犬神に憑依された僕のそのメリットは、身体を自由に幽体化させることができる。

そこに居るのに、そこから居なくなることができる。

存在感が薄い人のことを、影が薄いというが、僕の場合は完全に影が無くなる。まさに人外の極みである。ビバ人外。人外中の人外。

そして、今まさにその能力を駆使して、又夜の咀嚼を免れたというわけだ。

又夜は勢い良く空気を噛んでしまった形となっていたので、少々顎を痛そうに摩さすっていた。

「むー。ご主人。むやみに能力をつかわないでください。わたしのMPがへります」

「お前のMPが消費されるのか!？」

勿論そんなことは無い。

「で、ご主人」

又夜は乱れた髪を掻き分けて整え、床にあひる座りをした。犬なのに。

「わたしが言っているのは、人間のおんなのにおいがするという意味ではありません」

「あん?じゃあどういう意味だ」

「きょう、わたくし以外の憑依とかかわりませんでしたか?」

「いや、今日僕が関わったのはコンビニの店員とか、女友達くらいだぜ?」

「うそおっしゃらないでください。ご主人にともだちができるわけありません」

・・・なんだこいつ。

「いや、今日帰り際に僕が落とした学生証を女の子に届けてもらってさ。その子が中々良い子で、友達になったんだよ」

「ふん。そうですか」

又夜は何故か不機嫌そうに口を尖らせて、体育座りに座り直した。

落ち着きの無い犬だ。

「そうだな。でもちよつとその子が変わな子。って言っちゃうと失礼かもしれないけど、変わった子でさ。僕が思っていることや次に喋ろうとしていることを先読みしているかのように喋るんだよ。僕としては楽だったけどさ、なんというか、脳内を見透かされているようだったよ」

「ご主人のあさはかな脳内なんて、わたくしでもみすけます」

みすけますってなんだよ。日本語としてあっているのか、それ。

「ふーん。じゃあ僕は何を考えている？」

「わたくしのぱんつの色でしょう」

「くっ、何故わかった！」

「ご主人、まじへんたいですね。しょうけいに達するれるです」

「そうか、僕に憧れているのか」

「ご主人、憧憬ではなく、焼鶏です」

「焼き鳥かよ！！」

内容の無い会話だった。

「でも、そうですね。わたしはあまり自分以外の憑依に詳しくはないので、あしたあたりまた、おかると研究さーくるさんに顔をだしてみてもうでしょう」

僕は分かっている。こいつはただ単にオカ研の先輩が又夜にお土産に。ってくれるチョコパイが目当てなのだと。

見ると又夜は真剣な目付きで、涎を垂らしていた。汚いなあ。

「お前はどうせチョコパイ目当てだろう。涎がこんなにちはしてるぞ」

「な、なにをおっしゃるんです！ご主人！わたしはご主人のほしんを案じてですね！」

涎をもふもふしたシュシュみたいなやつで拭う又夜。

「あーわかったわかった。じゃあ明日、講義が終わったら行ってみるよ」

嫌だなあ。オカルト研究サークル部室。あそこは何回行っても薄気味悪い。

部屋が薄気味悪いだけならば、まだ僕の順応性も否が応でも高められるものの、僕はあの先輩が苦手なのだ。怪しく、胡散臭く、態とらしく、如何わしく、掴みどころがなく、ペダンチックな、あの女の先輩が僕は苦手なのだ。

「ではご主人、あしたはわたくしも同伴します。よろしいですね」
叉夜はにっこりと笑ってみせた。

・・・なんだと？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4084ba/>

怪異犬 カイイヌ

2012年1月14日22時54分発行